世界文学全集 30

カロッサ

幼いころ　ルーマニア日記　美しき惑いの年 他

手塚富雄　高橋義孝　訳

河出書房

世界文学全集 30　カロッサ

© 1969

編集委員
阿部知二　伊藤　整
桑原武夫　手塚富雄
中島健蔵

昭和36年8月30日　初版発行
昭和44年8月1日　17版発行
定価　430円

訳　　者　手塚富雄
　　高橋義孝
発 行 者　中島隆之
印 刷 者　草刈龍平
装　　幀　原　弘
印　　刷・中央精版印刷株式会社
製　　本・中央精版印刷株式会社
発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目　次

幼いころ……一
ルーマニア日記……八七
ドクトル・ビュルゲルの運命……二八三
美しき惑いの年……三三
年　譜……（斎藤栄治）四四五
解　説……（手塚富雄）四五五

幼いころ

手塚富雄 訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

はじめての楽しみ

わたしは一八七八年の冬のある日曜日に、上部バイエルンのテルツという町に生まれた。緑いろのイザール河がアルプスの山なみから泡立って流れ出るところにあるが、客の多い、この美しい温泉町については、残念なことにわたしはあまり記憶がない。わたしにものごころがついたのは、わたしの誕生後まもなく、父がこの町に近いケーニヒスドルフに医者として住いをさだめてからのことであった。わたしたちは、そこに七年間、小さい二階建ての家に住んでいた。下の方を診察室にし、二階には家族たちの部屋があった。それらの部屋の様子がどんなであったかは、まるでもう覚えていない。そのかわり、窓の外のことは、いまもありありとわたしの記憶に残っている。わたしにはじめて楽しみをあたえてくれた、いくつかのささいな物も、そうである。小さな雲母がきらきら散りばめられている青みをおびた灰色の、ピラミッド形をしたみかげ石もその一つだった。わたしはそれを、買ってもらったどのおもちゃよりも大事に思い、わたしの小さな建物の土台につかった。だが、一ばんすばらしかったのは、誰かが二階の窓際につるしておいた一つの大きな透きとおった青いガラス玉であった。わたしはそれを思いのままに振った、早く小きざみに振ることも、ゆっくりと大きく振ることもあった。そしていつもその動きは、わたしがほかに望んでいたり、したいと思っていたことと、内密に通じあっているようだった。

あるとき、母はわたしを夜なかに起こして、通りへ抱いて出た。そこには人々が集まっていて、なにか小声で話しあいながら、空をみつめていた。だれかの手がわたしの頭をつかんで、みんなの見ている方角へ向けさした。そしてこういう声がした、「ほら、ほうき星が見えるだろう」星のかがやきが眼にとびこんできて、それを見落としようもなかった。白い光の尾をひいた長い弓形が夜空のただなかにあって、村を見おろしていた。そのときの人々の辛抱強く空を見あげている様子、ほとんど不安げなささやき、高い空にぽつんとかかっている曲った輝き、それらすべてはわたしの印象に消えようもなくきざみつけられた。しかし、のちになってそれを思い出すと、その夜よりもずっと深い感動にとらえられる。三つになるかならないかで、そのときのわたしの心は怖がることも見惚れることも知らなかった。わたしは母の腕に抱かれていて、母を通じて、世界の確かな運行を感じたのであった。

患者たちは幾時間も父を待たなければならないことがたびたびだった。天気がわるく、通りへ出て遊ぶことが

許されないようなとき、わたしはその患者たちといっしょに時をすごした。青ざめた小さい顔に、大きな青い眼をした一人の若い人が一時かよっていたが、その人の話をきくのが、わたしはとくべつ好きだった。といっても、その人はしわがれた、ささやくような声でしか話すことができなかった。彼は村ではうす馬鹿といわれていた。だが都会に勤めていたことがあり、名を聞いただけでわたしをクラクラッとさしてしまうようないろいろなことを話してくれた。水晶のお城、凱旋門、イギリス公園、それに時によっては王様のことまでも。ルードウィヒ二世のうわさは、そのころどこでもひそひそとささやかれていた。わたしも母から、王のご殿の屋根の上にある冬も緑ばかりの温室のことや、方々のお城、そして王さまがアルプスの雪の夜をかむしゃらに突進されたことなどを聞いていた。けれど、このような秘密の事柄が、この若い患者のにぶい心をとらえていたのではない。それとはまったく別のことが彼をびっくりさせていたのだ。彼は、ミュンヒェンのキリスト聖体節の行列で王さまを見たのだった。王さまは、右手をまっすぐ前にのばして、とても大きな燃えるローソクをもち、聖体の後について歩んでいかれた。まる二時間というもの、すっくとのばした腕をただの一度も下げなかった人間わざとは思われない辛抱づよさが彼を感動さしていたのだ。彼はくりかえしくりかえし、ほかにああいうことのできる人はいない、だれでも試してみるがいい、と主張した。ほかの患者たちは微笑してこの話をきいていた。でもわたしは両親の寝室に走りこみ、テーブルから銀の燭台を一つ取りあげ、それを身体からずっと離して持ち、重々しい足取りで箪笥の鏡の前を行ったり来たりした。どのくらいがまんできるか、ためして見ようとしたのだ。けれど、この試験の結果がどうだったかは、いまはもう覚えていない。

それはそうと、わたしをいろんなおしゃべりで喜ばせてくれたそのあわれな人は、父があとで説明してくれたところによると、慢性の咽喉の病気にかかっていた。そこの働きは止まってしまって、息は銀のクダによって行われていた。クダは首に巻いた帯でとめられ、気管に直接挿し込まれていた。わたしはそういうしかけがじつにりっぱで羨ましいと思った。そして空気が金属性の音をたてて、吸われたり吐かれたりするのを驚きの気持ちできいた。そうして、この人は身体じゅう銀でできているのだという考えが、しだいにわたしのうちに根を張った。わたしは彼に休む暇も与えずに、うんと長く、強く、息をしてくれと、くりかえしくりかえし頼んだ。すると、信じられないような辛抱強さで、この不幸な人は、涙が浮かんでくるのをがまんして、わたしの願いを

かなえてくれた。そのうちとうとう父がこの残酷な遊びを見つけて、わたしにその部屋にはいることを禁止した。

秋近くなると、ケーニヒスドルフとボイエルベルクの間にある湿地にまむしがたくさん出て、父はたびたび蛇に噛まれた人のところへ呼ばれた。わたしは動いたり這ったりするものは何とも思わず、それと平気で遊んだので、それが父に心配の気持ちを起こさせたらしい。父はわたしをときどきまむしにやられた人のところへ連れてゆき、その咬傷のおそろしさをわたしに見せた。また湿地を馬車でゆくときも、たびたびわたしをいっしょに連れてゆき、まむしの姿を現にわたしに見させ、用心するようにわたしに教えた。わたしたちが通ってゆく眼の前をまむしが横切ろうものなら、父は駆者の手から鞭をひったくって、座席から烈しく二度打ってその蛇を殺した。蛇の首の急所を、父が打ち損じたという記憶はない。わたしたちはそれから馬車を降りた。父はわたしを近づかせ、その動物の特徴をしっかりとわたしに覚えこました。その姿を見るたびにわたしは、なんともいえない気持ちにおそわれた。いままで家で赤まむしの話が出たときには、わたしはいつも皆といっしょにそれを憎んで呪ったのであるが。――その一匹が埃の中にのびているのをみるや、私は別な気持ちになった。咬まれた犠牲者たちのことは忘れ、わたしはただ瀕死の蛇が、そのどうにもできない生まれつきを担って、これを最期に輝きをみせるのを見た。そして父のしたことは、まちがったことであり、権利の侵害であるような気がした。

まむしも神さまがおつくりになったのではないか、とわたしはきいた。父はそれに答えた。「そうだ。だがまむしは悪魔の仲間なのだ」

それからわたしが、お父さんにはどうして、これが毒蛇にちがいないとわかるか、ひょっとするとこれは毒のない蛇かもしれない、というと、父はその死んだ蛇をステッキの先で高くもちあげ、わたしの方に寄ってきて、「じゃ、それをためしてみようじゃないか。きっとまだ咬みつく力があるから」といった。そしてわたしが悲鳴をあげて飛び退くと、意地の悪い顔をして大声で笑うのだった。

わたしには歩きまわるくせがあり、半日もみつからないことがあって、母をたいへん心配さした。それで、よくコーヒーに招く親しい村の先生に、母は助けを求め、わたしをその先生の学校にときどきあずかってくれと頼んだ。ほかのことはともかく、少しはじっとして坐っていることを覚えこませたいと言うのだった。経験の深いその先生は、入学にまだまだ遠い幼な子にそのような試みをすることを、たしかにあやぶんではいた。けれどわたしは、めずらしいことがありそうな気がして行きたがった。

こうして、その先生はある日わたしを、小さな臨時の生徒として授業にいれてくれた。残念なことには、先生はわたしをほかの子供たちの間には坐らせず、教壇の上の机のうしろにある先生自身の椅子にわたしをかけさせ、絵本をあてがって、わたしの好きなようにさしておき、自分は教室のなかを歩きまわって、男の子や女の子にあれこれと教えていた。ときどき先生は愛想よくわたしに近づき小さな声で、どうだねとたずね、お行儀のよいのをほめ、チョコレートを一きれそっとわたしに握らせ、また離れていくのであった。絵本に興じているうちは、万事うまくいった。わたしは教室のなかの模様には気をとめず、先生の机のうしろにおとなしく坐っていた。高い机の向こうはほとんど見えないのだ。ところがそのうち本をすっかり見つくしてしまった。するとわたしは椅子の上に膝立ちして、教室を眺めまわし、下の方で起こっていることを頭に入れた。非常に大切なことであるのは、生徒はみな行儀よくじっと自分の席に坐っていることらしかった。つまり、誰かがおしゃべりをしたり、いたずらをしているところを見つかると、先生はたちまち机の上の鞭をとって、その無作法者をおどすのだった。それば かりか、とくべついけない場合には、その生徒は施し物を受ける貧しい人のように先生の前に手をさし出し、そこにピシリと一つちょうだいするのだ。それと同時にわたしが気がついたのは、先生は八方に眼をくばることはできない、それで、罰をうけないですんでいるわるさがだいぶあるということだった。この明白な秩序のみだれが、支配的な位置に坐っているわたしの心をつよく刺激した。子供の心にも大人の心にもひそんでいて、すぐ眼をさますあの道徳的なおせっかいが、わたしのなかに頭をもたげた。わたしは、たちまち先生といっしょに見張りをすることが自分の義務であると感じた。子供たちは当然そうあるべきように、手を机の上におき、みんな木像のように身うごきせずに並んで、おしゃべりはむろんのこと、ふざけることも、自分の頭をむだに長くかいたりしてもいけないのだ。わたしは声に出しては言わなかった。だが、先生から気づかれずにいるおしゃべり屋をみつけると、わたしはおこった眼つきをしたり、不吉を予告する目くばせを送って、かれの行儀を直そうとし、それでもきかないと、その子に向かって舌を出してやった。ところがある少年は大胆不敵にもわたしに向かって同じことをやった。たちまちわたしは、そのとき先生の机の上に使われずに載せてあった鞭をつかみ、教壇をいそいで降りて、その叛逆者を処罰しようと突進した。けれどまるで夢からさめた夢遊病者のようにその子の前にたたずんでしまった。教室の王座の上でこそ高くおごそかだったが、床の上に降りるとわたしはまったくの一

寸法師で、一ばん小さい生徒でさえ、坐ったままでも、わたしより背が高かった。どっと笑い声がおこって、いつまでもやまなかった。先生までがそれに加わった。ようやくその笑いがおさまると、この親切な先生はわたしに、うちに帰りたくはないかとたずねた。帰りたいとわたしが答えると、わたしは一冊の絵本と、お母さんによろしくということづけをもらい、やがて元どおりの自由の身にもどった。

青いガラス玉のさがっている窓は、道をへだてて丘に向かい、その丘の上には教会と墓地がそばだっていた。その高い灰色の塔には、黄ばんだ苔のむした赤茶色の円屋根があり、そのまわりをたいてい、声だかに鳴きながら黒い鳥たちが飛びめぐっていた。手すりのついた段々が道から教会へと通じていた。そしてこの広い段々の道を一年じゅう、人間の不思議な移り変わりの姿が、登ったり降りたりした。あるときは晴着をきた婦人が、大切に白ずくめにくるんだものを腕にかかえて登っていった。あるときは男の人が緑の花冠をいただいた女の人といっしょにその同じ道を登った。またあるときは燈明をつけ、香の煙につつまれて、鐘の鳴るなかを、花におおわれた密閉した箱が上へとかつぎあげられ、歌う人や泣いている人たちがそのあとについて行った。この最後の光景が、なによりもわたしを夢中にさした。わたしは窓の扉を左右にすっかり開き、音楽をかなで、あらんかぎりの声で歌い、歓声をあげ、力まかせにあのガラス玉を揺りうごかすのであった。

鱒

わたしの遊び友だちのなかに猟師の娘がいたが、その娘はお話をするのが何よりも好きだった。わたしより年上だった。顔は日に焼けてまるで黒かったので、大きなそばかすが白い点々になって浮きあがっていた。そのために村じゅうの人から「鱒」とよばれていた。彼女は悪事や地震や暗やみなど、不気味なことに通じていて、いつもいつもその場にいあわせたような調子で話した。ほどなく、やってくる世界の終末についても、彼女はたくさん知っていた。毎日、その確かなしるしを彼女は天に発見した。そしてわたしたちが林檎の木にのぼって無邪気にこの大地の果実を味わっているときなど、たびたび、甘い戦慄を感じながらその大地の没落の話に熱狂した。

ほかの子供たちの話すことは、すこしもこの鱒をへこますことはできなかった。何についても彼女はいつも説明の用意があったし、そうでなければ、へんな話をいっそうへんな話で打ち負かした。ただ、ときどき悲しかったのは、彼女は自分のお話にまるで品物のようにお金を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

払わせ、わたしたちめいめいが彼女の手に一ペニーか絹の小切れなどをわたさないうちは、話をしはじめないことだった。だいたいのところ彼女は、自分より年の小さいわたしたちにあまり親切だとはいえなかった。親から手荒らに扱われていたので、ほかの子供たちが同じように折檻されるのを見てよろこび、ひとの罪に熱心に眼を光らした。わたしに、わたしの犯した過失を認めさせると、容赦なくそれを母に言いつけ、時としてはわたしの処罰を提議した。彼女のそういうもくろみがうまくいくことがあったにしても、わたしは彼女をいつまでも怨んでいるわけにはいかなかった。なぜといって、そういう処罰がおこなわれたあとでは、彼女はきまってわたしに特別に美しい話をきかしてくれ、そのうえ、いつもの報酬さえなげけてくれるのであった。わたしを喜ばせたのは、彼女がひそかにつきあっているもののなかに、人間をたいへん好いている善良な生き物がいることだった。ベネディクテンバントの山に近く、その前山の岩穴に、水晶の角をもち、まっ白にかがやいている鹿たちが住んでいて、それは人間のように口をきき、彼女がたずねてゆくたびに心からのもてなしをするのだった。彼女が家でぶたれたあとでは、鹿たちはその頬をなめて彼女をなぐさめ、菓子や蜜酒をだし、着物や靴の贈りものをしてくれ、ふしぎな話をしてくれたりした。それをまた少女はあとでわたしたちに話すのであった。

一ぺんでいいから、その鹿のところへつれていってくれと、わたしは一生けんめいにこの女友だちに頼んだ。彼女は約束したが、一日のばしにしていた。とうとう大声で泣きながらわたしに告げた。あの美しい、賢い生きものたちは、狩人たちにかぎつけられ、傷をおわされて今までの住み場所を捨て、ずっと山の上の人の行けないところへ移ってしまったと。

やがてわたしは牧場で、鈴を鳴らしている牛たちのあいだを歩きまわって、つのとひずめに傷つけられるおそれはあったが、その眼をのぞきこみ、つよい気持ちとさそうなその鼻息に触れ、おもいあたたかいその身体に身を押しつけたりして喜びを感ずるようになっていた。けれど、動物たちといっしょにいると、いつもわたしはわけもなく悲しみに満ちたあるあこがれの気持ちに落ちこんだ。わたしは、ほかの子供たちにも同じようなことがあるのかと気をつけてみたが、そういう様子は見あたらなかったので、こんな気持ちをもっているのは世界じゅうでわたしだけだと思った。そのようなときに父や母、説教や祈りのことなどが頭に浮かぶと、がまんのならないことのようにそれを追いのけた。まるでわたしは、生きものの世界のなかで自分もただ生きものであろうとし、その罪のない憂鬱な深みから救い出されまいとして

いるようだった。けれど、やがて一種の驚愕にかられてとびあがり、家へ走って帰って、もとの落ち着いた人間の世界にもどったことを喜ぶのであった。

わたしたちのうちには、もともとある種の能力がひそんでいるのだが、ただ残念なことに、わたしたちはそれをいまの生の形式では展開することができないのだ、という詩人の言葉がもし本当なら、わたしにも、ほかの多くの人々にも、飛行の能力があるにちがいないと思われた。できるだけの時間、すごい速さで腕を振りさえすれば、人間は空中にもちあがるという気が急にしだした。わたしは広々とした野原に出て、練習をはじめた。けれども、わたしには思いがけないことだったが、重力の霊が一頭の大きな猟犬の姿となって近づいていた。わたしの妙な運動を見て興奮して、犬はわたしの腕に深くかみついた。治療のために数週間静かに寝ていなければならず、飛行はおしまいになった。しかしまもなく、第二の妄想がやってき、これはもっと長くつづいた。あるときわたしは馬車にのって父のとなりに坐っていてロイザッハ橋をわたったが、そのときわたしは、もしもすこし右寄りに斜めの方向に、うんと速く走ったら、水の上をわたって向こう岸につくことができるはずだということをありありと感じた。なにも考えないで、沈むひまがないほど、気違いのように速く走りさえすればいい、そうすれば、けっして失敗するはずはないのだ。だんだんとこの考えは固まってきた。とうとうわたしは、それを鱒にうちあけた。彼女は、それはちっとも珍らしいことじゃない、自分だって前に一度、ゼースハオプトからアメラントまでシュタルンベルク湖を走って渡ったことがあって、そのときスカートさえ濡らしはしなかったと言った。

けれど彼女は、心配そうな顔をしてつけくわえた。「物事は、まちがいなしというわけにはいかないわね。あんたが日曜日生まれのしあわせな子でなくちゃいけないの。そして駆けながらしょっちゅう唱えなければならないおまじないを知っていなければ、あんたがいくら速く走ってもダメなのよ」

そういって彼女は口をつぐみ、いかめしい顔をして遠くを見た。日曜生まれという条件が合っているので大喜びして、わたしはさっそく彼女におべっかを使って、その魔法の言葉をきき出そうとした。そして実際、わたしが彼女にあの青いガラス玉を提供すると、彼女はわたしにそれを教えてくれた。それはオゴルール！　オゴルール！　というのであった。そのうえ、彼女はわたしにはしばみの実を三つくれた。走るときそれを、左手にしっかり握っていれば、オゴルールが力をますのだ、というのであった。

そのうちに復活祭がきた。そして祭のいろいろな用意にまぎれて、波の上を歩きたいという望みは眠っていた。しかし、それも長いことではなかった。復活祭の月曜日、食事のあと、両親は馬車でテルッヘ行った。わたしは一人で窓際に立っていた。そこへゆっくりとした音をたてながら、黄いろに塗った郵便馬車が丘をおりてきた。銀と青のきれいな服をきた馭者がラッパで歌を吹きはじめた。それがなんともいえずわたしの身にしみた。どきどきと胸をはずませながらわたしは街道へ飛び出した。ラッパを吹いている馭者の頭が向こうを向いているのを見て、わたしはすぐさま馬車のうしろの踏板に腰かけた。ロイザッハの河まで乗っていこうと、ひそかに心をきめて。

教会にゆく人々がその道を向こうからやってきた。わたしにうなずきかけた。しかしそれきりわたしに注意しなかった。わたしが村のはずれで跳びおりるものと思っていたのだろう。けれどやがて村はおわり、そして青い空の下に、静かに、わたしのよく知っているものたちが現われた。街道の溝にそった白樺の並木、そのあたりにはもうきんぽうげや桜草が咲いていた。泥炭の島のある銅色の湿地、かたわのような銀松、そして遠くの方には雪のすじ、そしてそれらすべてのものの背景としてまっ白に雪につつまれた山々。馭者はつぎつぎに歌を吹き鳴らした。白いほこりが車輪から舞い立ち、道をゆく人の眼にわたしをかくした。ときどきわたしははしばみの実を握りしめて、オゴルールの呪文をくりかえした。

すこしたつとわたしたちの馬車は林を抜け、ある丘を登っていった。そこは風がすずしく吹き、ほこりもたたなかった。するとひとりの老人がわきの路から街道の方へやってくるのが見えた。その長いひげは青みがかった灰色で、上着はぼろぼろ、足取りはよろよろして、泣きごとをいうような調子でひとりごとをいい、はげしく両腕をうごかしていた。郵便馬車に追いつきたいらしい様子だった。ふと彼はわたしに気がつき、眼でわたしに合図したが、とうとう双の拳でおどしはじめた。私はびっくりした。が同時に、彼とわたしのへだたりが大きくなっていくのに気がついたので、わたしから彼に威しの動作をしかえした。すると老人は狂ったようになり、呪いをあびせかけ、とうとう石をひろってわたしの方に投げつけた。馭者は、それがみんな自分に向けられたのだと思いこみ、人のいい声でどなりかえした。「眠って酔いをさますがいいぞ、地獄に落ちるなよ」そして車をいそがせた。この叫び声が、かみなりのようにわたしを正気にもどした。「地獄」、――それはひびきだけでもわたしにはおそろしい、おごそかな言葉だった。その言葉がひびくとき、たいてい、神という名も遠くはないのだ。老人を

おどかしたということが、ひどくわたしの心を苦しめた。だれかが始めからわたしにこの老人は地獄に落ちそうな人間だと言ってくれたなら、わたしは彼に手をあげたりはしなかったろう。そして突然、わたしは、いま通っている場所が、まるで自分の知らないところだと気がついた。こんなにたくさんの木は見たことがない。こんなに大きな岩や石も。わたしはこわくなりはじめた。けれど、ちょうどそのとき登りはつきて、車はとめどなく坂をくだりはじめた。それでわたしはただ板にしがみついているのが、せいいっぱいだった。と、思いがけなく、このおそろしい急降下は終わって、馬車は青い郵便箱のとりつけてある或る大きな白塗りの家の前にとまった。気持ちよく単調にひびく人声、それを縫ってツィーターの音、歌声と九柱戯の球の音がする。そして開け放してある料理店の庭をのぞくと、そこには大ぜいの人が、大きな灰色のジョッキを前にして、長いテーブルをかこんで坐っているのが見えた。

さんざんに打たれたあとのようにぐったりして、わたしは馬車から滑り降りた。と、まもなく、びっくりした顔をしている子供たちにとりかこまれ、若い母親たちのところへつれていかれた。その母親たちは、あっけにとられている駅者に笑いかけて、どこの上品なお客さんをつれてきたのかねと言った。婦人たちはみな、祭の晴着を着かざっていた。銀の紐とふさのついた黒や緑のまるい帽子をかぶり、がんじょうな首のまわりには金のホックのついた鎖の輪をかけ、手にはそれぞれ祈禱書と、青と黄の花の束をもっていた。婦人たちはわたしにどこの子かとたずね、井戸ばたでわたしの埃にまみれた顔を洗ってくれ、何から何まで世話してくれた。しまいにわたしを、自分たちの夫のところへ連れてゆき、テーブルにつかせて、復活祭の卵やビスケットやミルクをくれ、そのあいだたえずお母さんがどんなにあんたのことを心配しているだろうと、くりかえした。最後に彼女らは、二時間後に戻らなければならない駅者に、わたしをまた連れて帰らせるのが、一ばんいいやりかただときめた。腰掛はどれも、つぎつぎにふえてくる客でいっぱいになり、ひっきりなしにツィーターがひびき、一方で歌いだすと、ほかの人たちは手で膝をたたいて拍子をとった。みんな上々のきげんだった。そして誰もが、こんなに晴れた暑い復活祭には今まで一度も逢ったことがないと、断言した。

するとどうだろう、あの地獄落ちの爺さんもこの庭にはいってきた。帽子をとってそれを低くさげ、うやうやしくテーブルからテーブルへあるきまわって、施しものを集めた。その顔は今はまるで父である神さまのようだった。わたしは、彼がわたしに寛大であってくれるよう

に、そしてわたしをみつけないようにと、ひそかに熱心にお祈りした。実際、彼はもう少しもわたしには気がつかなかった。そしてわたしがわたしのもらった赤い卵のうちの一つをその帽子に入れてやると、このうえもなくていねいにおじぎをした。

御馳走で腹がいっぱいになると、子供たちはわたしをつれだした。かくれんぼうをしようというのだった。ひろい果樹園は、たくさんの建物としげみに隣りあってい、かくれんぼうには、もってこいだった。やがてわたしも、かくれてさがされる番になった。穀物倉のようなながい建物が、いいかくれ場所のように思われた。その中へ足をふみいれ、うすくらがりの中を手さぐりして行くと、向こう側の屋根裏のあかりとり窓を抜けて、何ともいいようもなく美しいものが、さしこんでくる光の方へ消えるように出てゆくのが見えた。黒・緑・金いろの滝で、それは、わたしの知っているどんなものにも比べることができなかった。好奇心に燃えてわたしはそのあとを追い、そのくぐり戸にからだを押しこんで、外に出ようとした。それはなかなかうまくゆかなかった。上着は裂け、ボタンがとんだ。けれどとうとうわたしは外のひろい庭に出て、一羽のきれいな孔雀のそばに立っていた。それはゆっくりと歩みをはこび、わたしの嘆賞の眼をうけていた。けれどそのときすぐ近くに、鬼のよび声が聞こえた。わたしの前にはアシと葉の落ちきった灌木のしげみがあって、それがただ一つの隠れ場所だった。だが悠々と歩いてゆく華やかな鳥はさからいがたくわたしをひきつけ、決心がつかぬままにわたしはたたずんでいた。

――と突然、この輝く生きものが叫び声をあげた、鋭い、意地悪な声で、わたしをののしるのだった。――びっくりし、二重においたてられて、わたしは、しげみにとびこみ、枝や蔓のからまりをはらいわけながら、前へ前へと進み、とうとう小石をしきつめた空き地に出た。そこに立ちどまって、わたしは耳をすませた。子供たちの声はなく、孔雀の声もなかった。かすかな水音が地面を揺すっていた。その地面は、白い点々のある大きな葉の群れと紫いろのたくさんの花におおわれ、しげみと木々の枝を透かしてずっと遠くまで水が光って見えた。わたしはあたりを見まわした。なかば水につかった黒い灌木のしげみが顔を出しているいくつもの水溜りや沼から、細い、乾いた地面が、わたしを隔てているだけだった。そこにはたくさんの木やアシが切りあつめられ、それらがぴったり並びあって、さわがしい水の上に、まるで小さな筵のようにただよっていて、かわいい小鳥たちがそれにとまってゆれていた。けれど、その向こうには渦をまいている大きな奔流があった。わたしはその美しい小鳥たちをもっとよく見たかったが、もっと先に進むことは、

ある妙なものによって妨げられた。不気味な黄いろっぽい生きものが、背の高い藪と藪との間の地面をいっぱいに覆っているのだ。毛虫のようでもあるし、ナナギのようでもあった。あるものはからだをすこし曲げており、あるものはまっすぐに伸ばしていたが、ぞっとさせられたことには、どれも少しも動かず、まるで死んでいるみたいなのだ。ふだんわたしは生きものを少しもこわがらなかった、甲虫でもねずみでも蛇でも。けれどこの目のない生きものは、おそろしかった。わたしはこういうものを前から知っていた。それはどこかになにげなくぶらさがったり、よこたわったりしている。それでカタツムリの殻か何かのように安心して手にとると、急に指の先でびくりとうごいて、いやでもそれが生きものであることを認めなければならないのだ。いまも眼の前にあるのは、そういうものだと、わたしは思った。だからこの疑わしい生きものに靴の先で触れるか、ふみつぶすことになると考えただけで、背筋がぞっとした。いっそ今度は新しい発見をあきらめた方がいいと考え、小石の河原から水を眺めることだけで満足した。

　そのとき、ふと川の流れがとまって、わたしの方が岸といっしょに、はげしい勢いで見知らぬ世界へ流れてゆくような気がした。同時にかるいめまいを感じたが、この錯覚から眼をそらすことはできなかった。そのときわたしは、自分がロイザッハ河を歩いて渡ろうとしたことを思い出した。また空のどこかを、オゴルールという言葉が飛んでいた。しかしそのとき、河の向こう岸に音楽が近づいてきた。手風琴の音らしい。あかるい合唱の歌声もする。けれど歌い手たちは見えず、ただ色とりどりの着物やリボンが、小さな木の幹や灌木の向こうにちらちらするばかりだった。それは着飾った陽気な人たちの一隊にちがいなかった。そのときあの錯覚は消え、水はまた流れだした。そして音楽とはなやかな色どりが遠ざかってゆく一方、波の上をさまざまなものが流れてきた、椅子や熊手や捏ね槽などが。そしてすぐそばを、こわいほどの現実の姿で、茶色っぽい動物がまるくふくれあがった白い腹をみせ、光る歯をむき出して流れて行った。これをみたとたん、底知れぬ郷愁の思いが湧き、お母さんのところへ帰れるかどうか、不安になってきた。ちょうどそのとき心配そうに、ほとんど怒ったような声で、わたしをさがす子供たちの声がきこえたのは、しあわせのような気がした。わたしは大きな声で返事して、そっちへ駆け出した。しげみの中に巻きこまれ、ゆすぶった枝枝から濛々とこぼれる黄いろい埃の雲につつまれて、むせかえった。わたしは上を見あげて、この粉の雲が、さっきあんなにも気味悪くわたしの道をふさいでいたのと同じ黄いろい毛虫から出ているのだということを発見し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb